

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 12 日現在

機関番号：32661

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2014

課題番号：24659971

研究課題名(和文) 質的研究における主観的テキスト解釈の問題を解決するための言語論的研究

研究課題名(英文) A linguistic study on the problems of subjective text interpretation in qualitative studies

研究代表者

高木 廣文 (TAKAGI, Hirofumi)

東邦大学・看護学部・教授

研究者番号：80150655

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)： 質的研究での主観的なテキスト解釈の問題点について、構造構成主義、ウィットゲンシュタインの言語に関する論考、科学的言語学であるソシュールの一般言語学およびチョムスキーによる普遍文法に基づき検討した。医療関係者、看護関係者及び哲学者等からテキスト解釈の問題点について情報収集し、心脳構造の言語システムの仮説的モデルを考察した。その結果、テキスト解釈の一般的方法をある程度は定式化できることが示唆された。さらに、ヴィエルジュビツカによる言語の概念的原子要素を用いたテキスト解釈、脳科学からのアプローチ、クワインの科学的な言語哲学の理路が、今後のテキスト解釈の科学研究上で有用ではないかと考えられた。

研究成果の概要(英文)： In order to consider the scientific meaning and method of text interpretation in qualitative studies, the issues of subjective text interpretation was discussed mainly about the problems of language described by L. Wittgenstein, especially from the viewpoint of structural constructivism, and also F. Saussure's general linguistics and N. Chomsky's universal grammar. The information about the issues of text interpretation was obtained by medical, nursing, and philosophical professionals. Consequently a hypothetical model was discussed about the linguistic system in mind-brain structure. It was thought that some general method for text interpretation may be able to be constructed systematically to some extension.

Hereafter it may be useful to develop the scientific method of text interpretation by the idea of A. Wierzbicka's conceptual primitives of languages, by some approaches of brain science, and by some results of linguistic philosophy by W. Quine.

研究分野：看護学研究法

キーワード： 質的研究 看護研究 テキスト解釈 科学的言語学 構造主義科学論 言語哲学 脳科学 概念的原子要素

## 1. 研究開始当初の背景

看護研究は、その対象から得られたデータの質により、計量的なデータに基づく量的研究と、インタビューなどによるテキストデータに基づく質的研究に大きく二分される。

量的研究は、従来から医学領域でも通常行われてきた研究であり、その科学性を疑う議論はほとんどない。

一方、質的研究は、その対象選択の方法、テキスト解釈の方法などから、その科学性を問題とする議論は少なくない。

質的研究の科学的問題点は、質的研究自体の科学性とテキストの主観的解釈にあると考えられる。

質的研究の科学性については、構造主義(西條、2005)や構造主義科学論(池田、1998)に基づけば、ある現象についての同一性による構造化(モデル化)という点から、量的研究と同様に科学的営為であると考えられることができる(高木、2011)。

しかし、テキストの主観的解釈の問題については、ソシュールの一般言語学(丸山、1981)やチョムスキーの普遍文法(福井・辻子、2003)に基づく心脳構造における言語システム存在を仮定することで、説明可能であるとも考えられるのだが、反証不能な仮説の域を出ていない(高木、2011)。

一方、ウィトゲンシュタイン(1922)は『論理哲学論考』(野矢、2003)の中で、真善美や倫理などの「語りえぬものについては、沈黙せねばならない」と述べている。この意味から言えば、質的研究で対象として扱う人の感情や物語などは、すべてが沈黙すべきことであり、ほとんどがナンセンスということになる。しかしながら、後期ウィトゲンシュタインは『哲学探究』(森本、1976)の中で「言語ゲーム」という考えを提示しており、質的研究は言語ゲームそのものとも考えられる。この点から、一般言語学および普遍文法とテキスト解釈の関係を、ウィトゲンシュタインの哲学を思考の道具として再検討することは、テキストの主観的解釈の共通理解への可能性を開くものと考えられる。

## 2. 研究の目的

質的研究の最重要課題であるテキストの主観的解釈について、科学的言語学の視点から検討する。

もう一つの課題である質的研究の科学性については、構造主義科学論(池田、1998)に基づけば、研究対象とする現象については、特定の概念を用いて構造化するという点からは、科学であると考えることができた(高木、2011)。しかし、質的研究におけるテキストの主観的解釈の問題が、いまだ手つかずに残されている。

科学的言語学であるソシュールの一般言語学(丸山、1981)やチョムスキーの普遍文法(福井・辻子、2003)の仮説のみに基づく心脳構造における言語システムを考えるだ

けでは、研究者間での共通理解を得ることは難しいだろう。

本研究は、これらの科学的言語学に依拠しながら、ウィトゲンシュタインによる『哲学探究』(森本、1976)で言及された「言語ゲーム」や私的言語の共通理解の考えを導入し、

質的研究におけるテキスト解釈の主観的解釈が、人の心脳構造の言語システムという共通構造に基づくことを論証し、これにより

テキストの主観的解釈は、決して非科学的な方法ではないことを示す、ことを目的とする。

## 3. 研究の方法

質的研究におけるテキスト解釈について、科学的言語学の立場から検討し、人に共通する心脳構造中の言語システムの存在を仮定することで、テキスト解釈が可能になるといふ、言語解釈のためのモデルを考えたい。

質的研究や(科学)哲学の専門家などから、このような心脳構造中の仮説的なモデルに対する意見などの情報収集を行い、それをもとにしてモデルの修正を試みた。

得られた成果については、国内外の学会で発表し、さらに意見聴取や情報収集を行った。これらの手順を研究期間内に反復的にを行い、心脳構造での言語システムと主観的なテキスト解釈に関する仮説的モデルの検討を行った。具体的には、以下のような手順に従った。

### (1) 言語システムの検討

テキスト解釈は、研究者自身の心脳構造における言語システムによって自律的に行われる。しかし、どのようにしてテキストの意味内容が、心脳構造の言語システムから産出されるのかは、いまだ明らかではない。

本研究では、チョムスキーが主張するように、心脳構造の中に生来的な言語の文法構造があり(福井・辻子、2003)、これに基づいてテキストの解釈ができるようなソフトが構成されているのではないかという仮説的なモデルを考えたい。

上記のモデルの検討のため、科学的言語学であるソシュールの一般言語学、およびチョムスキーによる普遍文法、生成文法に関する書籍類を中心に文献検討を行った。そして、心脳構造における、人類に共通する言語システムを考えることで、質的研究でのテキスト解釈の妥当性について検討を加えた。

### (2) テキスト解釈システムの検討

竹田(2001)は『会話の信憑構造』として、我々が日常的に行う会話において、我々は共通理解を得たと感じるまで、会話の意味内容の確認を行っていることを論じている。このような会話の信憑構造の考え方を参考にし、心脳構造中の言語モデルを考えたい。

また、ウィトゲンシュタインは、言語ゲームという考え方や、他者の歯痛の例を用いて、

言語の意味理解の問題を論じている。このような考え方は、質的研究におけるテキスト解釈の共通理解の問題と密接に関係すると考えられる。

上記の論点から、質的研究におけるテキスト解釈についても、研究者が共通理解になぜ至るのか、もしくは反対意見が出るのかという問題を考えた。とくに、万人に共通する心脳構造中の言語システムの存在により、我々がテキスト解釈で共通理解に至るための、言語解釈モデルが考えられるのではないかとこのことを検討した。

### (3) 学会報告での意見聴取など

上記の仮説的な心脳構造中の言語システムと主観的なテキスト解釈に関するモデルについて、国際学会や国内学会で報告した。その時に、発表内容に対する意見聴取や情報収集を行い、さらにモデルの洗練と検討を加えた。

## 4. 研究成果

### (1) テキストの主観的解釈と言語獲得

テキスト解釈における主観的解釈の問題は、質的研究で最も重要な問題であるのに、実際にはほとんど議論されてきていない。

これまでの哲学的論考や科学的言語学の成果をもとに考察したところ、現実には、テキスト解釈がそれほど「主観的に」行えるわけではないことが明らかになった。

すなわち、これまでのテキスト解釈の理論的背景を再検討し、テキスト解釈と言語システムの仮説的モデルをまず検討した。

言語システムに関しては、科学的言語学であるソシュールの一般言語学、そしてとくにチョムスキーによる普遍文法、生成文法に関する論考を中心に文献検討を行った。

ギリシャ時代から、『なぜ子どもはたいした教育や環境がなくとも、5歳程度になれば言葉を話せるようになるのか』という『プラトンの問題』があった。これに対する回答として、チョムスキーは『普遍文法』の存在を提唱した。すなわち、言語の解釈系は人の心脳構造の中に遺伝的に、生来的に定められており、そのプログラムに従って特定の言語が獲得されると考えたのである。しかも、ソシュールがすでに指摘していたように、言語の要素である語彙は社会的制約が強く、恣意的ではあるが勝手に意味内容を変更することができない。

これらの点から、以下のような、万人に共通する言語の意味解釈のためのシステムが心脳構造に存在するのではないかと考えることができる。

### (2) 言語解釈の共通システムについて

すべての人類に共通して存在する、心脳構造中の言語システムの仮説的モデルを考えた。このとき、テキスト解釈に関しては、上記のように竹田(2001)の提唱する『会話の

信憑構造』を参考とした。また ウイトゲンシュタイン(野矢, 2003)の『論理哲学論考』の中から言語に関する箇所を中心に検討した。これらをもとにして、チョムスキーの普遍文法、生成文法の考えを取り入れ、言語およびテキスト解釈に関する仮説的なモデルを検討した。

言語システムを考える場合、以下のようなコンピュータとの対比を検討することで、よりテキスト解釈の問題を明確にできるのではないかと考えられる。

量的研究においては、コンピュータによる統計学による解析方法が一般的である。かりに人型ロボットが普及した時代においては、データ解析はそのロボットが行うのが一般的になるだろう。実験や調査などのデータを一瞥して、瞬時に統計学的有意性をロボットが報告したとしても、誰もそれをロボットの主観とは言わないはずである。それはロボットの電子頭脳は正確であり、同時に統計学の同一のソフトがあれば、どのロボットが計算しようとも分析結果も同一である。電子頭脳というハードと統計学計算ソフトが共通しているのならば、ロボットの主観などはあり得ないと考えられるからである。

同様な視点から、質的研究における心脳構造の言語システムとしてのテキスト解釈プロセスに着目した。すなわち、ハードウェアとして人間の心脳構造は、基本的に人によって大きく異なることはないだろう。さらに、チョムスキーが提唱するように、言語が遺伝的に生来的なものであり、人の脳内に共通するシステムとして構築されるものと考えられる。したがって、コンピュータと同様にハードとソフトの両面から見て、テキスト解釈を可能とする言語システムは、各人に個別的なものではなく、心脳構造の中に万人に共通するシステムとして構築されている。

上記の観点から、テキストの解釈は、一般に思われているほど「主観的」に個別的ではなく、多くの人間に「共通する」システムから導かれた結果であると考えられる。

さらに、言語構造論や自然意味論メタ言語を導入することで、テキスト解釈の新たな地平も明らかとなってきた。

### (3) さらに科学的言語解釈システムの構築

コンピュータによる自動翻訳のように、テキスト解釈が一定の手順に基づいて行われるような言語システムについて、科学的言語学に基づいて検討した。

質的研究でのテキスト解釈を一定の方法で行うために、町田(2011)による言語構造基礎論に基づく文構造の構成要素を考慮することを提案した。すなわち、文には構造があることを考慮することにより、会話のテーマや主語、述語、目的語、時制、場所などが明確になる。このような情報をテキスト解釈時に考慮することで、例えば、グラウンデッド・セオリー・アプローチでのプロパティヤ

ディメンションの発見が容易になり、系統的にテキスト解釈が可能になるのではないかと考えられた。

さらに、ヴィエルジュピツカ (2011) による自然意味論メタ言語の視点を導入することで、言語の概念的原子要素を用いたテキスト解釈の新たな方法論を提唱することの可能性を検討した。この概念的原始要素は、すべての言語で共通する語彙であり、それ以上に還元できない語彙でもある。このような、根源的に還元不可能な語彙に基づいたテキスト解釈の方法を考えることで、主観的な解釈から、より客観的なテキスト解釈が可能になるのではないかと考えられた。

また今後は、科学的言語学に基づくテキスト解釈の研究を行うためには、脳科学からのアプローチが重要であると考えられた。チョムスキーの普遍文法や生成文法については、失語症の研究やf-MRIによる高次脳機能の研究などの科学的なアプローチにより、ほぼその正当性が確認されている。しかし、まだ具体的なテキスト解釈の方法論は提示されていないのだが、今後の発展が期待される。

また、これまで日本の質的研究ではあまりふれられていない数学者でもあり哲学者でもあるクワイン (飯田、1992) の科学的な言語哲学の研究成果を検討することが、これからのテキスト解釈の研究においては、有用ではないかと考えられた。

#### <引用文献>

- アンナ・ヴィエルジュピツカ：第5章言語普遍的・類型論的観点から見た英語使役構文の意味論；マイケル・トマセロ編著、大堀壽夫他訳：認知・機能言語学 - 言語構造への10のアプローチ、173-226、研究社、2011
- 池田清彦：構造主義科学論の冒険、講談社、1998
- 竹田青嗣：言語的思考へ - 脱構築と現象学、径書房、2001
- 丸山圭三郎：ソシュールの思想、岩波書店、1981
- 町田健：言語構造基礎論 - 文の意味と構造、勁草書房、2011
- ノーム・チョムスキー著、福井直樹・辻子美保子訳：生成文法の企て、岩波書店、2003
- 西條剛央：構造構成主義とは何か、北王子書房、2005
- 酒井邦嘉：言語の脳科学、中公新書、2002
- 高木廣文：質的研究を科学する、医学書院、2011
- ウィトゲンシュタイン著、藤本隆志訳：哲学探究、ウィトゲンシュタイン全集8、大修館書店、1976
- ウィトゲンシュタイン著、野矢茂樹訳：論理哲学論考、岩波書店、2003
- W.V.O. クワイン著、飯田隆訳：論理的観点から - 論理と哲学をめぐる九章、勁草

書房、1992

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

高木廣文：教育講演「在宅看護学における知の創出 - 質的研究と科学をめぐる誤解を解く - 」、日本在宅看護学会誌、査読無、2(2)：4-14、2014

高木廣文：質的研究でのテキスト解釈の問題、保健の科学、査読無、55(10)：659-664、2013

高木廣文：EBMの視点からミックストメソッドを考える、社会と調査、査読無、第11号：40-46、2013

〔学会発表〕(計6件)

高木廣文：保健医療そして看護におけるビッグデータの活用と課題、日本看護研究学会第41回学術集会、2015年8月22日、広島国際会議場(広島県広島市)

高木廣文：科学としての地域看護学・質的研究について考える、日本地域看護学会第18回学術集会、2015年8月1日、パシフィコ横浜会議センター(神奈川県横浜市)

高木廣文：質的研究と量的研究を架橋する、招待講演3、第19回日本緩和医療学会学術大会、2014年6月20日、神戸ポートピアホテル(兵庫県神戸市)

Takagi, Hirofumi: A Method for Text Interpretation by Linguistic Structuralism and Semantics, 12th Annual Advances in Qualitative Methods Conference, June 23, 2013, Edmonton (Canada)

高木廣文：質的研究は科学的研究か？、特別講演、第63回聖マリア医学会、2013年2月2日、久留米医師会館(福岡県久留米市)

Takagi, Hirofumi: Subjective Text Interpretation in a Qualitative Study is not so "Subjective", 18th Qualitative Health Research Conference, 82, Oct. 23, 2012, Montreal (Canada)

〔図書〕(計1件)

高木廣文著、蔡淑娟訳：探索質性研究的科学性、合記図書出版社(台湾)、2014、180頁

〔その他〕

ホームページ等

<http://homepage2.nifty.com/halwin/kaken24menu.html>

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

高木 廣文 (TAKAGI, Hirofumi)

東邦大学・看護学部・教授

研究者番号：80150655